

近隣の自然の変化に目を向ける No. 47

「われらは兄弟姉妹花 We are brothers and sisters flowers」

2021年5月7日

単に色違いの花が多いが、形や香りが異なる花や似て非なる花に出会えると、花の観察の楽しみが倍加する。今回は、そのような花に注目し、植物学に基づく名前（青字）だけでなく、見た時の印象から戯れの名前を付けてみた（黒字）。

野生蘭の代表と言えるキンラン、ギンランが隣合わせに咲いている姿をはじめてみた。出会えた嬉しさと親しみから、直ぐに金さん銀さん姉妹を思い浮かべた。道を歩いていると甘い香りを放ち、顔を向けさせる花が3種のジャスミン。それぞれ少し日を置いて咲き、春真っ最中にある幸せを振り撒いている。

ヒナゲシは昔から馴染みだが、ナガミヒナゲシは、帰化植物で1961年に世田ヶ谷で初めて確認され、繁殖力が強く、瞬間間に全国に爆発的に拡散した。最近、繁殖力が衰えてきた感じがするが、強靱さには驚かされる。

白のツツナミソウは北斎の立浪を想わせるが、今年、青色の兄弟花が混在する姿を見た。一方、ニオイバンマツリは白と青の花が一本の木に咲くので双子花と言えよう。

牡丹の花は終えた今、豪華なシャクヤクの花が咲いている。「立てば芍薬」とは、女性の美しい立ち振る舞いや容姿を形容する言葉だそうだが、私が見た花は白も赤紫花も長い茎がしなり、深くおじぎをしているようだった。その心は？ツンとせず美しさは変わらず、人や環境に柔軟に対応する現代女性の姿を示している？

シラー（釣り鐘草）は公園で広く見られる可憐な花だが、オオツルボ（大蔓穂）という派手な花塊を上向きに咲く兄弟花がある。私は外国で見たことがあったが、最近、近隣でもよく見かける。

カタバミは、復活祭（イースター）の頃、仙川教会の庭にも毎年花を咲かせる強靱な草だ。ハート型の3枚葉は、三位一体（父なる神・神の子キリスト・聖霊）を象徴するデザインとして、また日本では、戦国時代から「根を絶やさぬ強さ」から家紋に使われて来たと言う。

今年初めて長い糸状のヒゲを垂らしたウラシマソウが芦花公園内に姿を現した。浦島太郎が釣り糸を下ろしている姿から命名されたようだ。兄弟と言えそうな植物が2種あった。ムサシアブミとカラスビシャクで、受け口のような形が共通している。

この他にも兄弟花が多くあるので、違いに注目して観察してみてもどうでしょうか？